



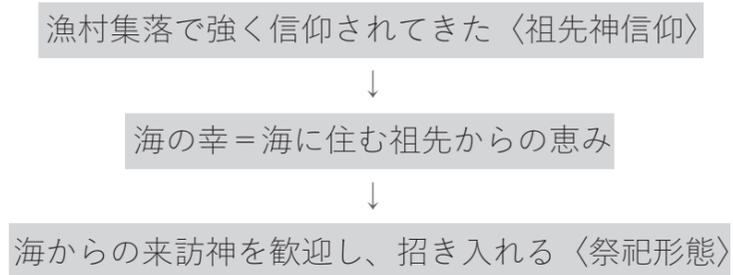
先人の信仰と知恵が映す、これからの漁港村空間

□0. Background/Purpose 背景 / 目的

かつて純漁村集落として栄えた田後地区は現在、人口減少や少子高齢化により同時に漁業も衰退の一途をたどっている。漁業の産業化に伴い整備が行われた港空間は、産業化の抜け殻のようなものが残り、かつての賑わいや人だまりは影を薄めている。しかし、漁師のまちであったからこそ生まれた景観や、その環境の中で生きる人々の文化・生活がそこにはあった。骨格としてその記憶や痕跡を残し続け、その関係性の中で変わりゆく空間と生活の様子を思い描くことができないだろうか。これは、生業としての漁業が衰退していくまちの、記憶の残し方とこれからの在り方の提案である。

□1-1.-Figuration logic 形成論理

地井昭夫氏は著書『漁師はなぜ、海を向いて住むのか？—漁村・集住・海廊』において、純漁村集落の形成の論理を〈来訪神型空間形式〉と呼び、〈来訪神への祭祀形態〉として形成されてきたと仮説することで、町の形成や生活様式についての理解が得られるとした。

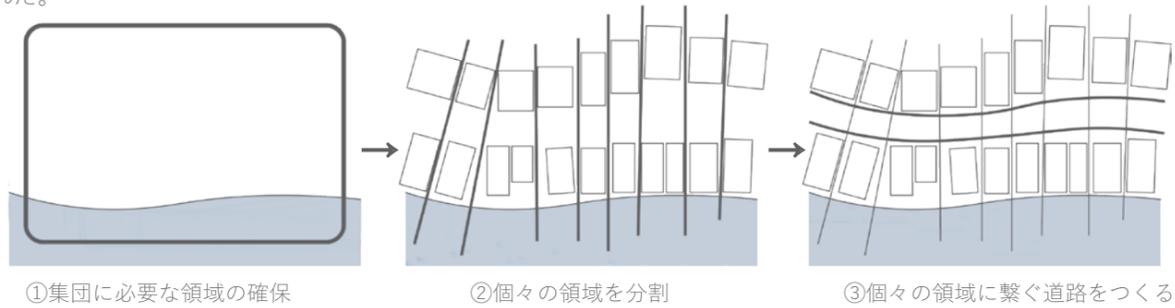


□1-2.-Feature 漁村集落の特徴

生産空間として、また〈来訪神型空間形式〉として形成された漁村集落は、農村など他の生業を持つ集落とは異なる形態を持って成長したことで、特殊な空間構成や生活様式を生み出した。

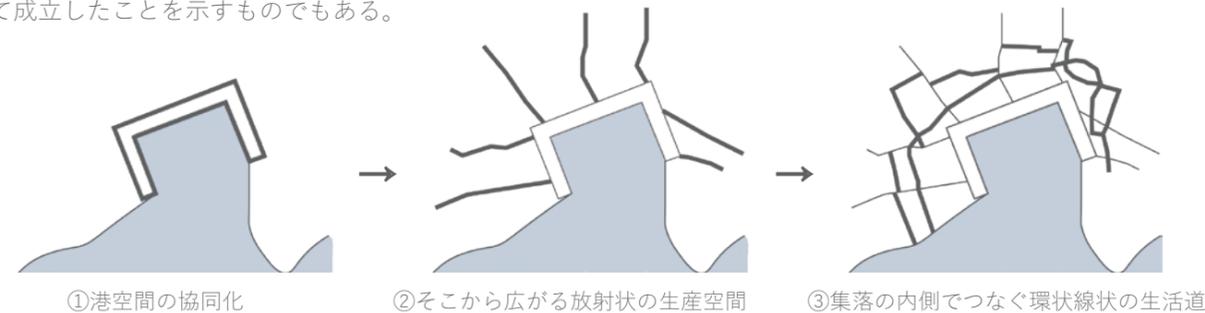
一1. 短冊状の空間構成

祖先からの恵みを迎えるようなかたちで空間を構成することで、「海の幸を協同の労力で平等に分け合うことになる」という祖先の学びから生まれたと考えられる。母屋一倉一舟小屋の並びが同一所有者で占められ、母屋と倉の間を通る道路が形成された。



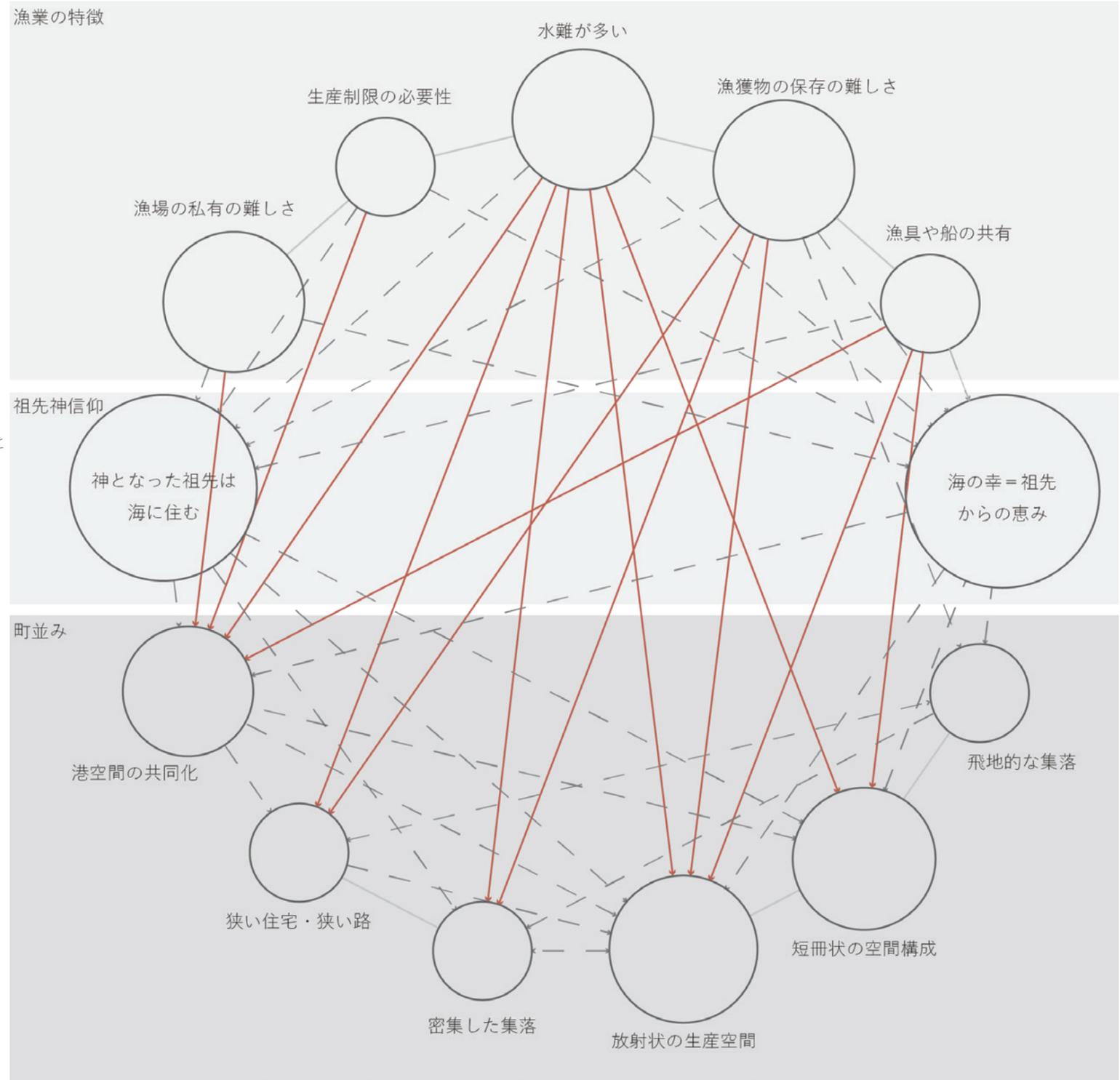
一2. 求心的な集落の広がり

港から放射状に発する生産空間は、その先にある神社や寺等と港を繋ぐ参道でもあり、港を中心として町全体の空間が形成されている。これは、漁業という生業と信仰の深い関係性を示すものであり、同時に漁業という産業の性質に強い影響を受けて成立したことを示すものでもある。



□1-3.-Flowchart フローチャート

資源依存型である漁業の特徴と祖先神信仰が町並みに与えた影響は大きく、これまでの人々の生活様式やルール、文化の骨格となっていた。この関係性をフローチャートで可視化することで、これらを元に田後地区の町並みや文化と比較し、共通点や相違点を明確にする。

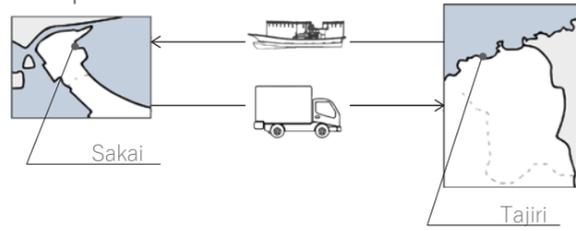


□2-0.Tajiri 田後地区について

鳥取県北東部に位置する岩美町の海岸線は、起伏に富んだ厳しい断崖が続くもので、山陰海岸国立公園に指定されている。その中に位置する田後地区は、飛地だったこともあり純漁村集落として栄え、現在に至る。



現在の漁業形態は沖合底引き網漁業が主流で、ほとんどの漁獲物が同鳥取県の境港まで運搬され、そこで売りに出される。その一部が田後地区まで冷蔵車で運搬され、小規模な市場が行われている。

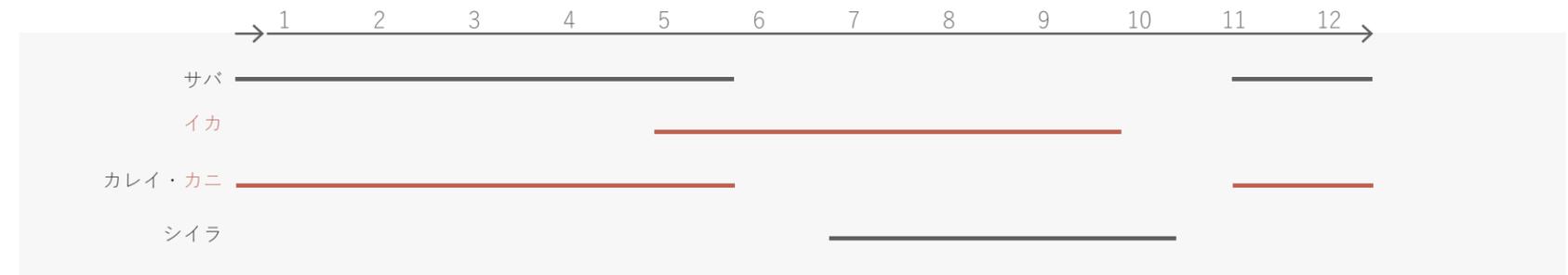


□2-1.-History 田後地区の歴史

- 1590 石見の国から出稼ぎに漁に来ていた漁師によって村が開かれる。
- 1848 最初の築港が行われ、御蔵米廻送船の係留のための50mの捨石防波堤が築かれる。
- 1868 「恵比寿大名神社」を「田後社」と改称。
浜浦富の「荒砂神社」の神のうち、事代主である恵比寿様を持ち出し、漁業の神様として祭る。
- 1870 浦富の支配下を離れ、田後村として独立。
- 1890 捨石防波堤が大波により崩壊。
- 1902 組合員211名の「田後村漁業組合」が設立される。
鱈漬漁業、沖延縄漁業（タイ・サバ・カレイ・サメ等）、一本釣り（イカ・サバ等）、磯漁業（瀬網採貝藻）等が営まれていた。
- 1919 漁港の改修、船据え場の増築、貯氷場の設置など、現在の協同組合のような体制を整える。
- 1926 小漁港の指定を受け、港の改修工事が開始される。
当時の戸数は215戸、人口は1101人。
- 1949 田後漁業協同組合が設立される。
底曳網漁・沖合イカ釣り漁を中心に、漁村・漁港として成長。
また、運輸省指定港湾となる。
- 1951 避難港の指定を受ける。
- 1954 町村合併による9町村を合併し、岩美町大字田後となる。
- 1968 沖合イカ釣り漁業として本格的に操業。
最盛期となり、船の増加や新築ブームが起きる。
- 1969 第4、第5、第6防波堤が直轄事業として整備された。
- 1977 200海里制定後の漁獲量が減少。価格の低下も重なり、徐々に衰退の道をたどる。

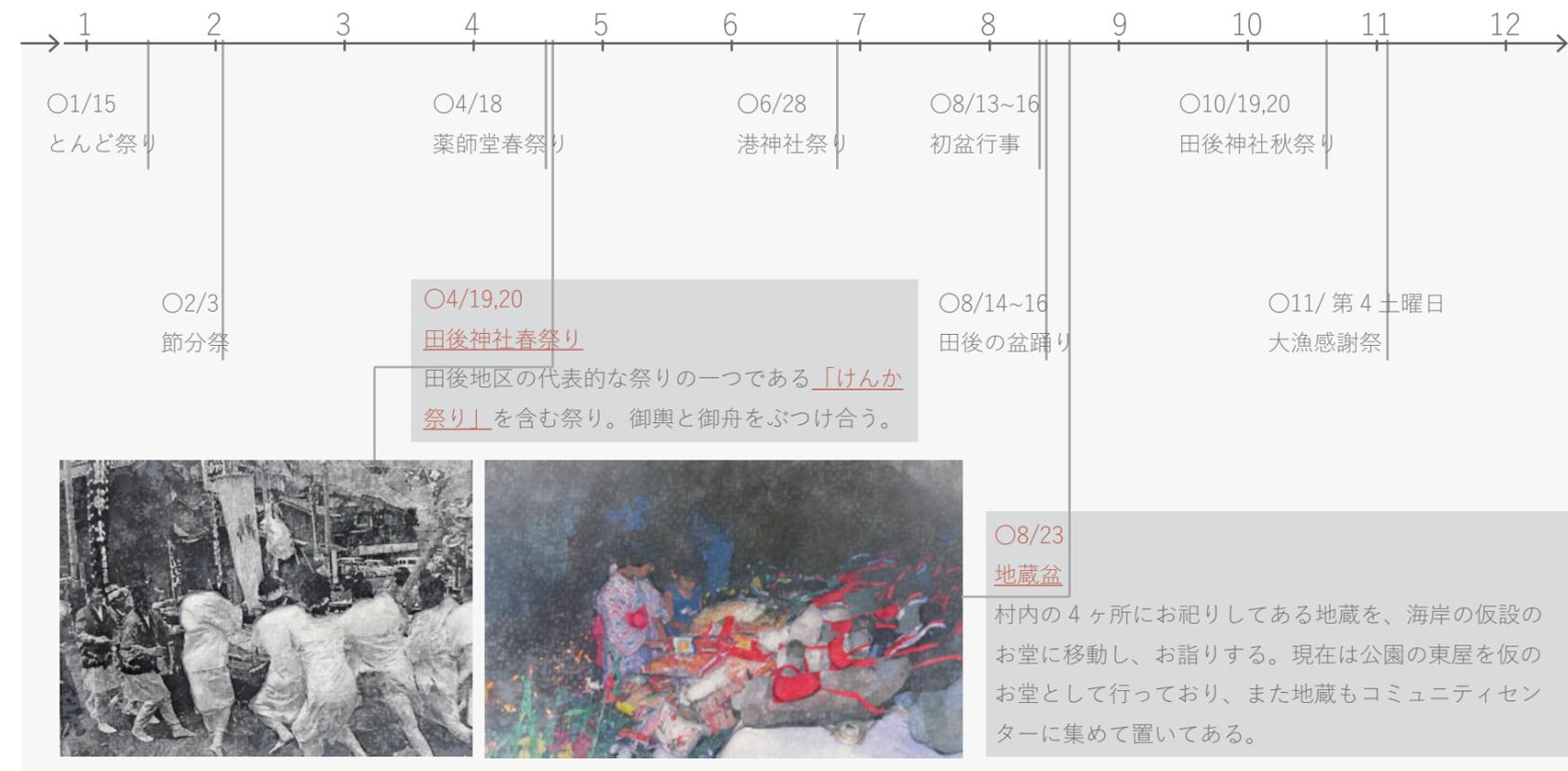
□2-2.-Catches 漁獲物

田後地区では、サバ、イカ、カレイ、カニ、シイラが主な漁獲物であった。現在はイカ、カニ、ヒラメ、カサゴ、メバルなどが主な漁獲物となっている。



□2-3.-Ritual 祭祀

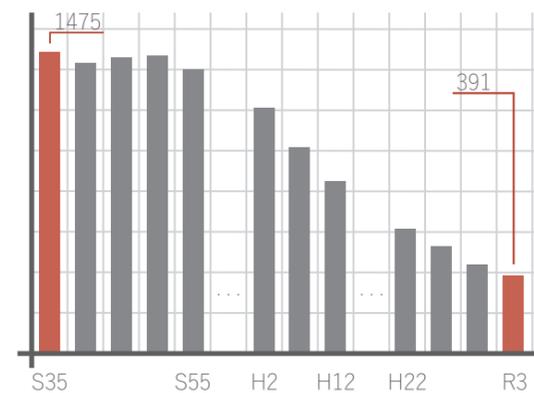
田後地区には、けんか祭りや地蔵盆を代表として、多くの祭りが現在も残っているが、そのほとんどの起源や祀る対象、場所に「海」が関連し、それは港空間で行われている。本計画では、代表的なけんか祭りと地蔵盆の二つの祭りに焦点を当て、祀る場・舞台としての計画も行う。



□2-4.-Problem 田後地区の課題

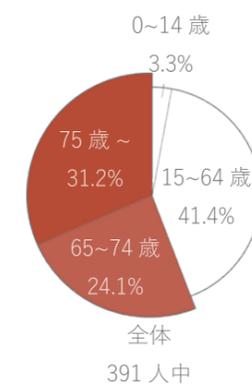
ー1.人口減少・少子高齢化

飛地だったこともあり、純漁村集落として栄えた田後であったが、200海里制定や、通信手段・交通機関の発達により、そこに住む必然性を失い、人口は減少した。また、職を求めた若者は田後から離れ、少子高齢化も進んでいる。



ー2.漁業の衰退

人口の減少少子高齢化に伴い、後継者が居なくなったことで漁業従事者が減少し、衰退に拍車がかかった。当たり前にあった港空間を生活の中心としていた人々の姿や風景は廃れ、消えつつある。



□3-0.Proposal-Target site 対象敷地

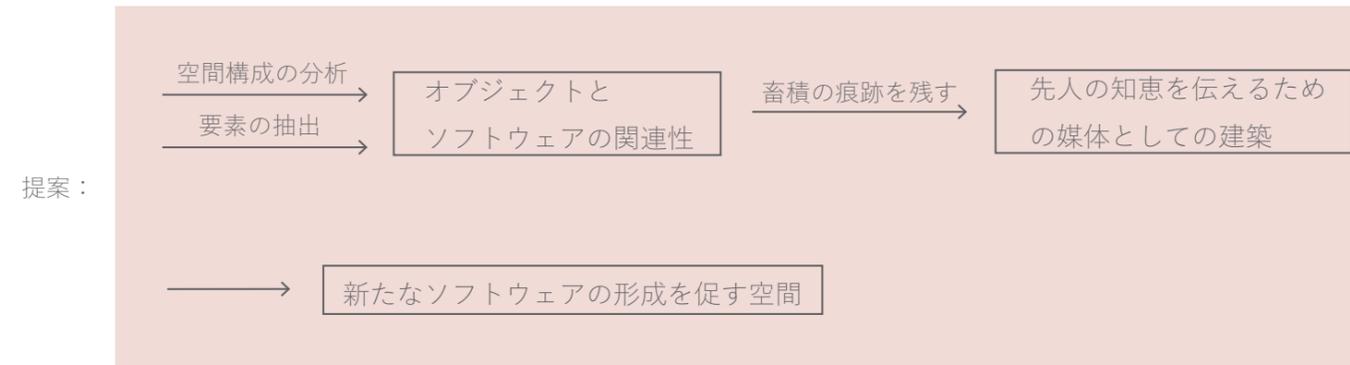
計画において、①港空間、②港空間から田後神社を繋ぐ小路の周辺空間

の二つを対象敷地とする。小路は、祭りの際、神社に納めてある御輿と御舟を港空間へ運ぶときに通る道で、港空間と信仰の繋がりを象徴する空間である。二つの空間が、それぞれどのように形成されてきたかを捉え、異なる印象を持ちつつも動線やソフトウェアによる繋がりを感じる空間を建築する。



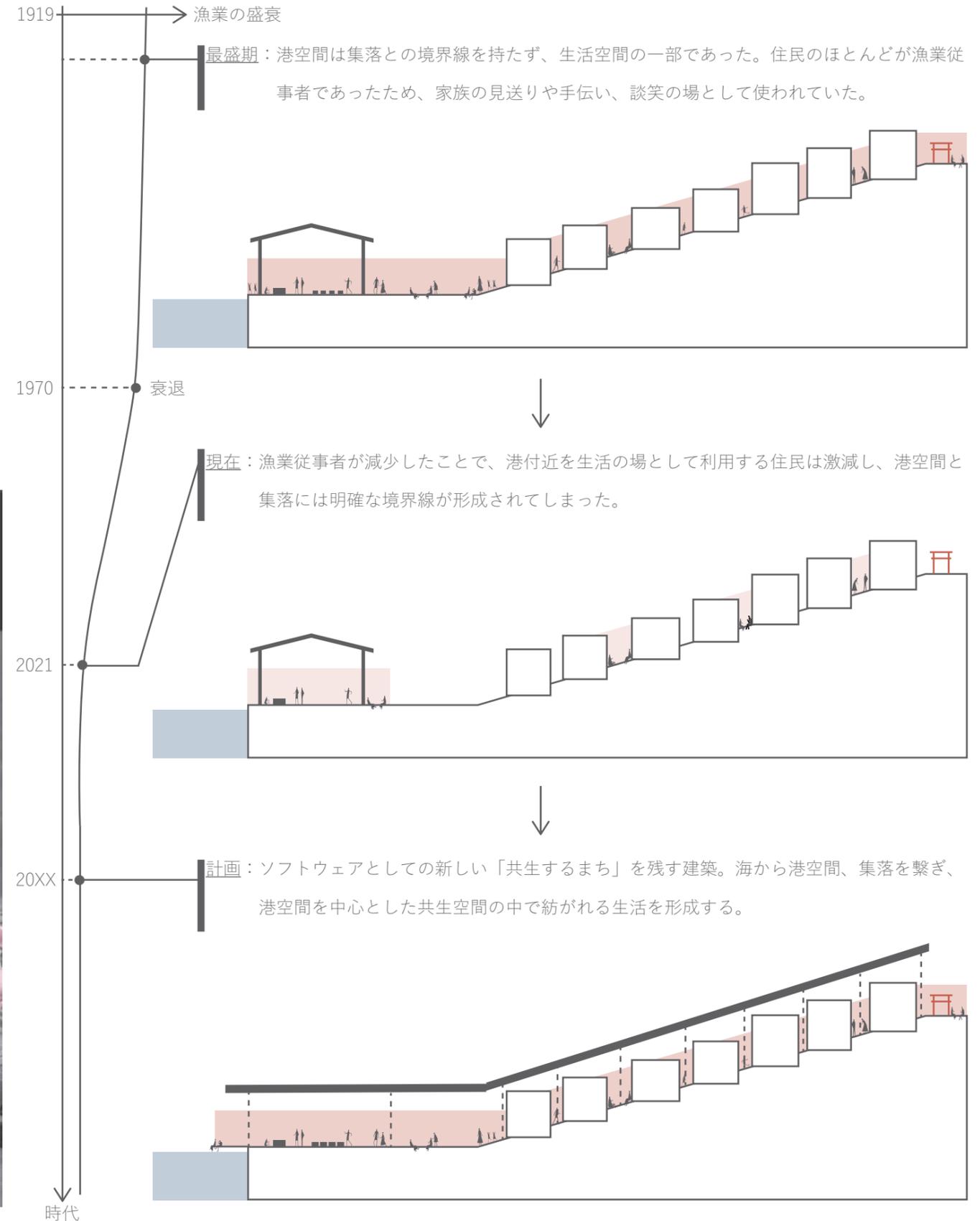
□3-1.-Concept コンセプト

現在、田後地区はオブジェクトとしての「漁村集落」は残るものの、その「かたち」を形成してきた「はたらき」である漁業が衰退してきたことにより、「共生するまち」というソフトウェアを失いつつある。更に、ソフトウェアが薄れたことで、漁業や信仰等、先人の知恵が今の町並みが形作られてきたプロセスに大きな影響を与えたことを伝えるための媒体まで失われつつある。この計画では、建築に「先人の知恵を伝えるための媒体」としての役割を持たせる。漁師の町として形成されてきた痕跡を残す媒体は同時に、衰退していくまちに新しいソフトウェアの形成を促し、純漁村集落に新しい空間価値を持たせる一助となる。



□3-2.-Cohabitation 共生

かつての田後地区は、町全体が港空間を中心とした共生空間であった。漁業という大きなソフトウェアがあったからこそ生まれた共同性は、漁業の衰退と同時に薄れてきている。さらに、神となった祖先を祀り、迎え入れるはずの港空間は、集落との繋がりを持たない空間となってしまった。漁村集落の空間構成に眠る共同性を顕在化し、新しいソフトウェアを生み出す空間となる。



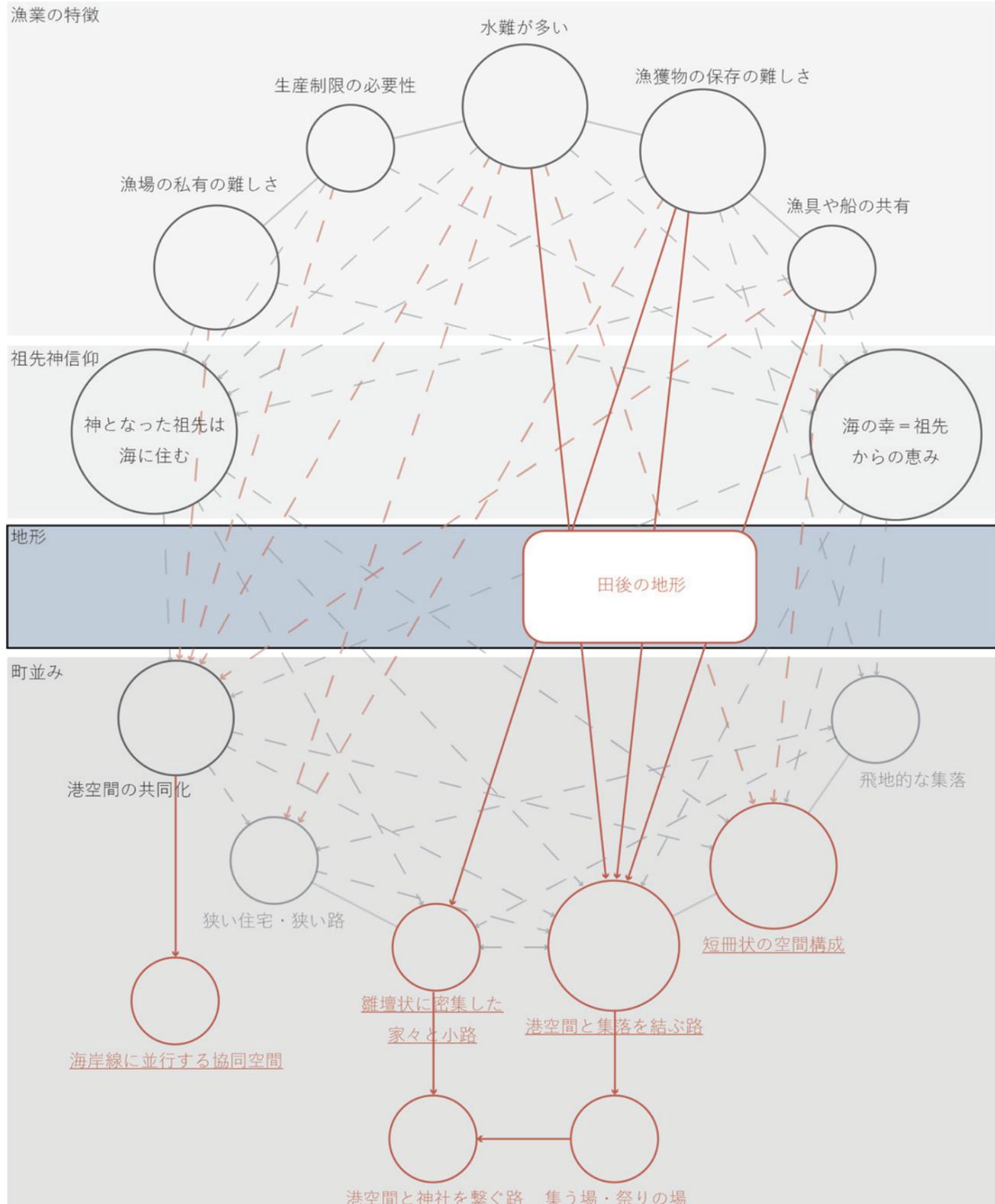
□4-0.Proposal-Design 提案一意匠

町並みを分析することによって抽出した要素を骨格として空間構成を行う。それぞれの要素と、それらが形成された要因としてはたらしとの関係性を明らかにすることで、現在の空間構成に眠る先人の知恵を残す。骨格に絡まるように生活が営まれ、まちに潜む公共性を顕在化する建築となる。これら基盤・骨格として残すことにより、漁業の衰退や信仰の変化によって生まれる生活基盤の変化に対応しつつ、現在もZ弱まりつつも残る文化の継承を促す。

□4-1.-Analysis 分析

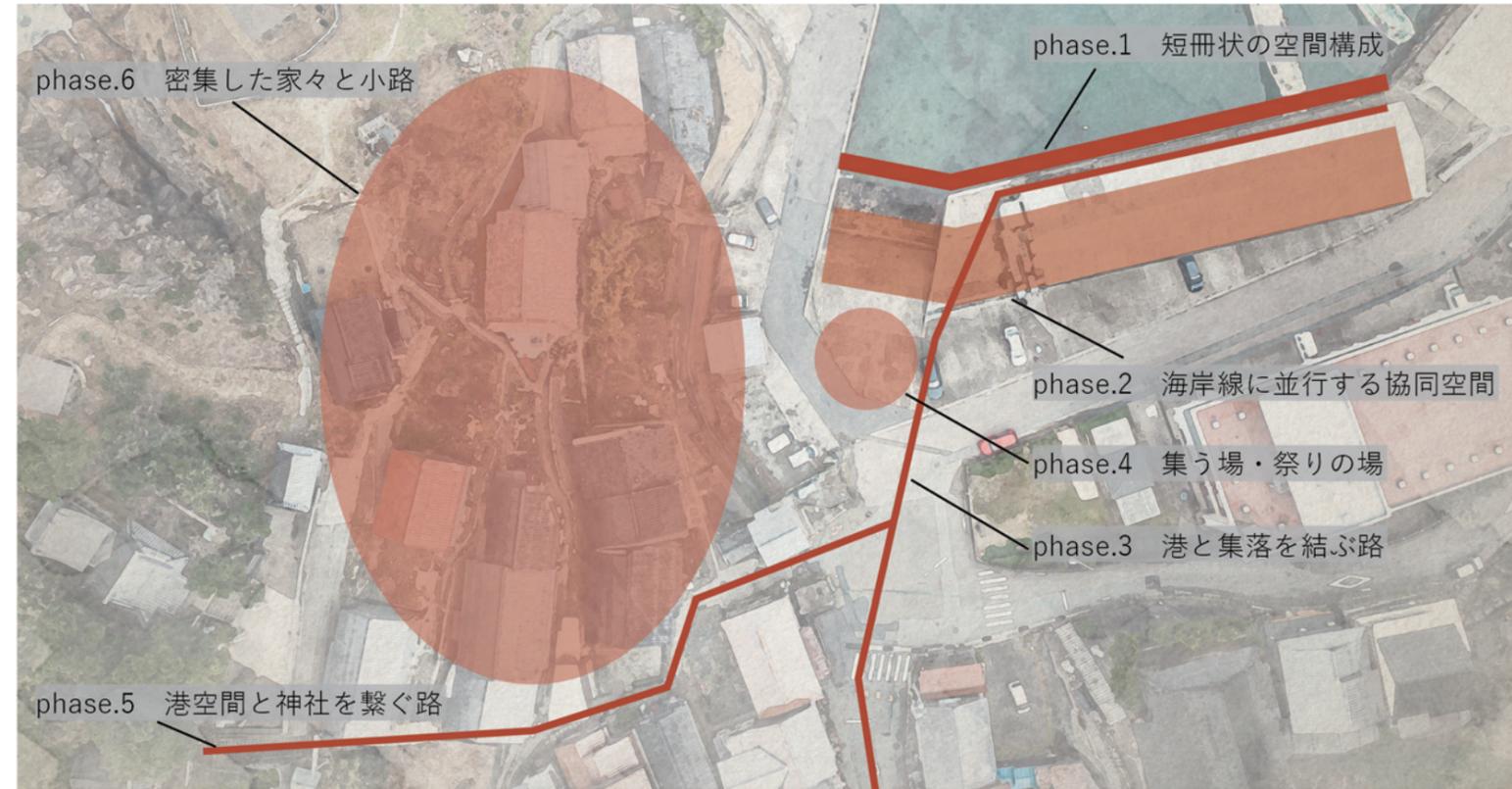
一般的な純漁村集落の骨格となる空間構成を元に、田後地区の空間構成の特徴を見出した。そこには、田後地区の地形によって起きた変則的な発展と、漁業、祖先神信仰のはたらしによって形成されたかたちが混在する様子があった。

田後地区の空間構成の形成原理が直接かたちとなる設計を行う。



□4-2.-Element 要素

町並みを分析することによって、まちを構成する5つの要素を抽出した。これらの要素を骨格として敷地の空間構成を行う。



phase.0-1 地形

phase.0-2 漁業

phase.0-3 信仰

phase.1 短冊状の空間構成



母屋—東屋（倉）—砂浜（舟小屋）の構成が見られる。

phase.2 海岸線に並行する協同空間



海に面する平地は、漁業を統べる組合の施設が建てられた。

phase.3 港空間と集落を結ぶ路



働く場である港と住居を繋ぐ主要の路が形成される。

phase.4 集う場・祭りの場



2と3が接する空間に、集う場・祭りの場としての性格が生まれる。

phase.5 港空間と神社を繋ぐ路



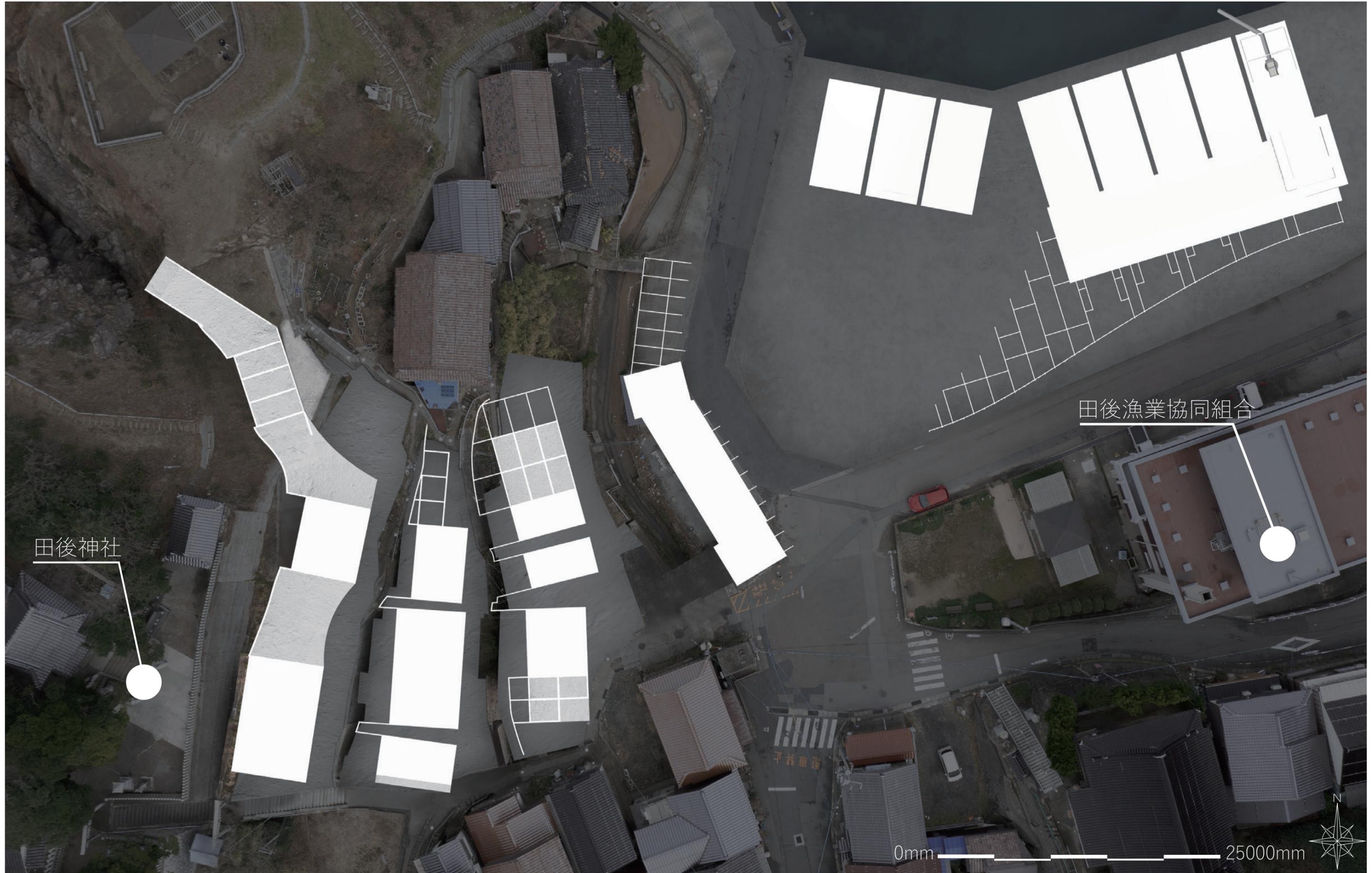
ソフト面において、集落と信仰を繋ぐ重要な役割を持つ路となる。

phase.6 雑壇状に密集した家々と小路



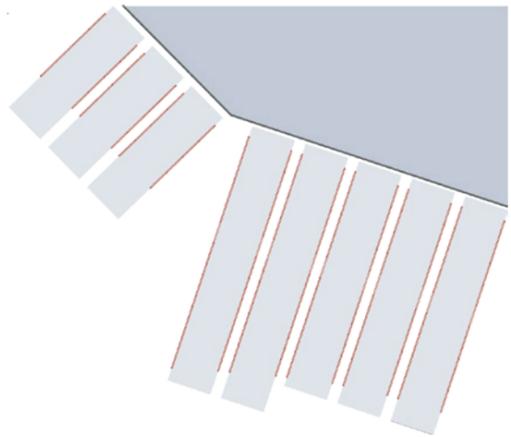
傾斜地に住む空間を造ってきた痕跡の残る空間となる。

□4-3.-Plot plan drawing 配置図

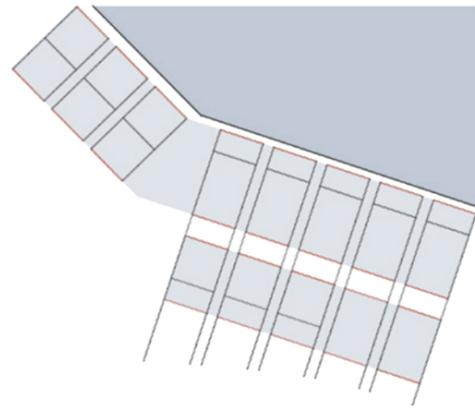


□5-0.Harbor-Void 港空間ーヴォイド

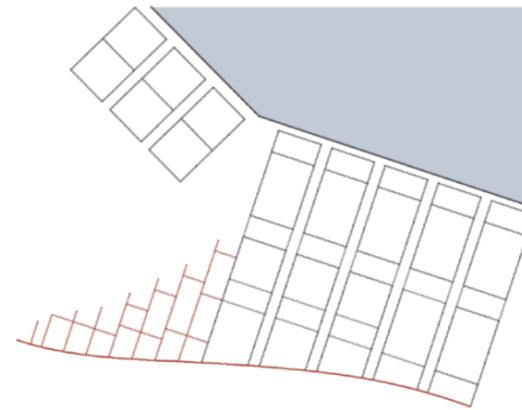
舟屋の文化のない田後地区は、海に面する空間に建築物がなく、共有する場として曖昧な境界線によって分けられた空間であった。細い柱を、港空間に内在する軸に沿って並べることで、ヴォイド空間による流れを持つ空間となる。この柱は、港空間と集落空間の境界を曖昧に滲ませるとともに、先人が培ってきた空間の使い方を紡ぎ、継承する役割を持つ。



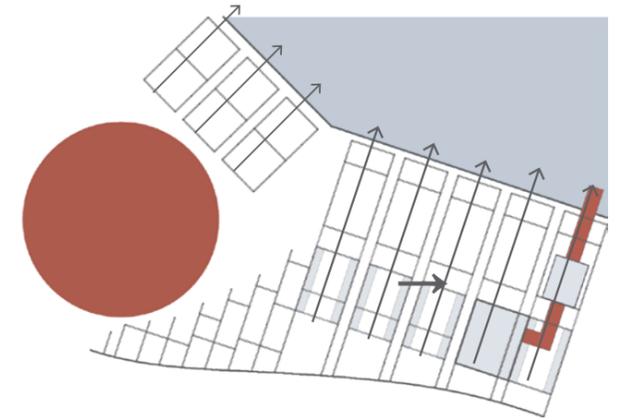
短冊状の空間形成を促す柱と梁



海岸線に並行する協同空間の形成を促す梁



集落へ続く路と港空間の境界となるヴォイド空間

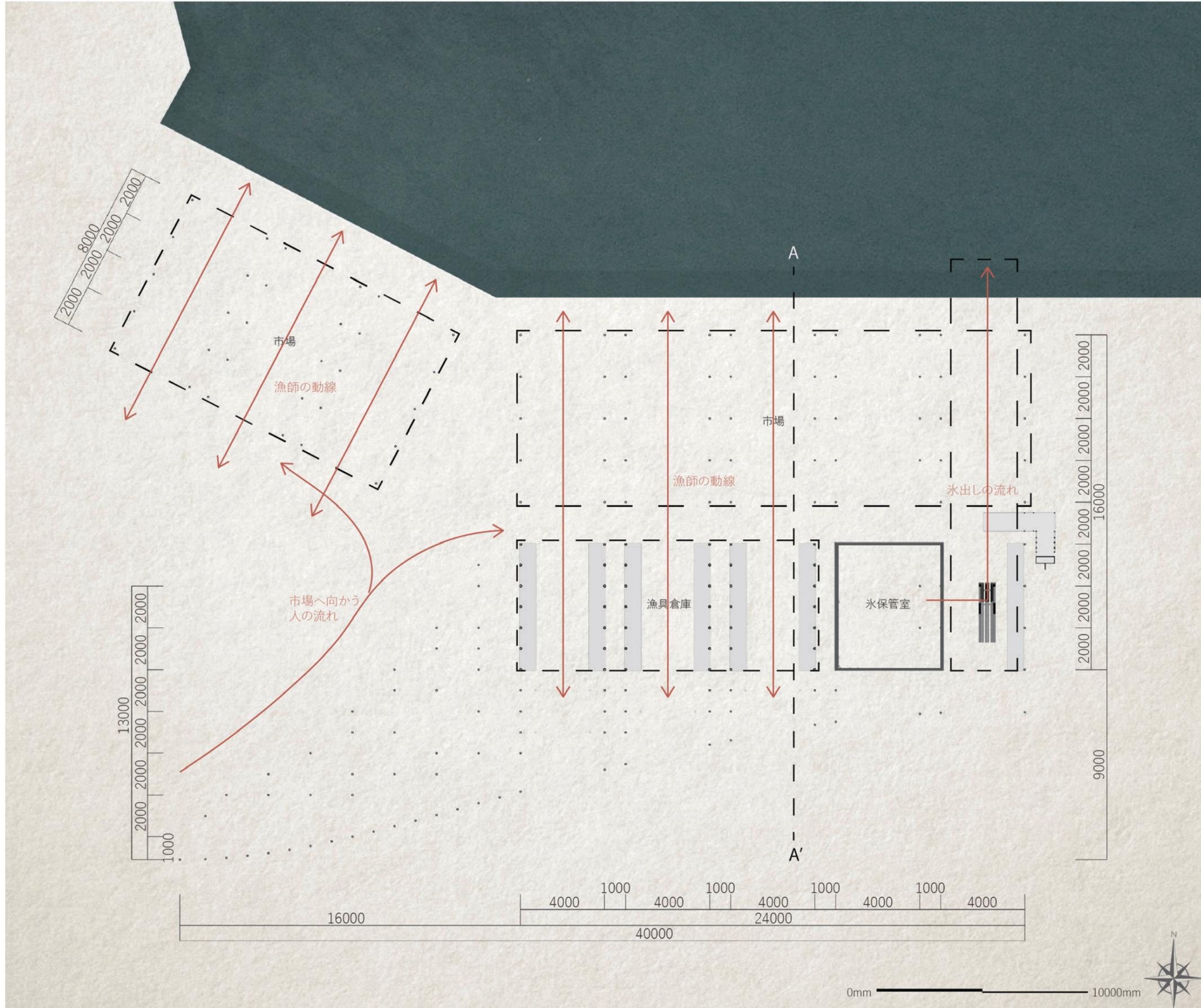


骨格の役割と流れに沿って漁具倉庫、氷出し、祭りの場が形成される

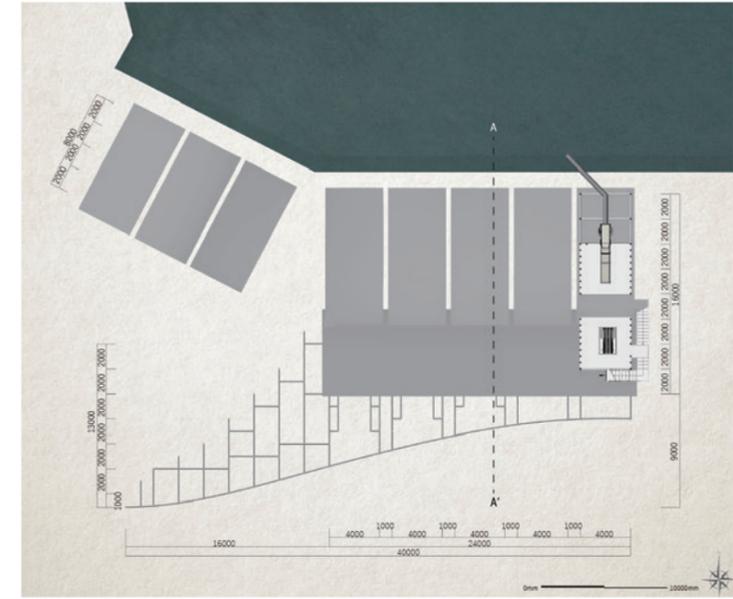


□5-1.-Floor planning 平面計画

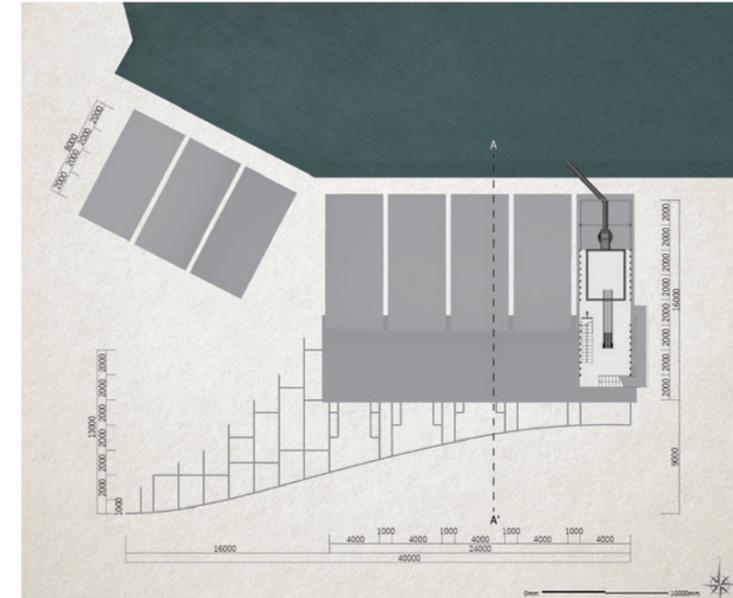
□1 階平面図



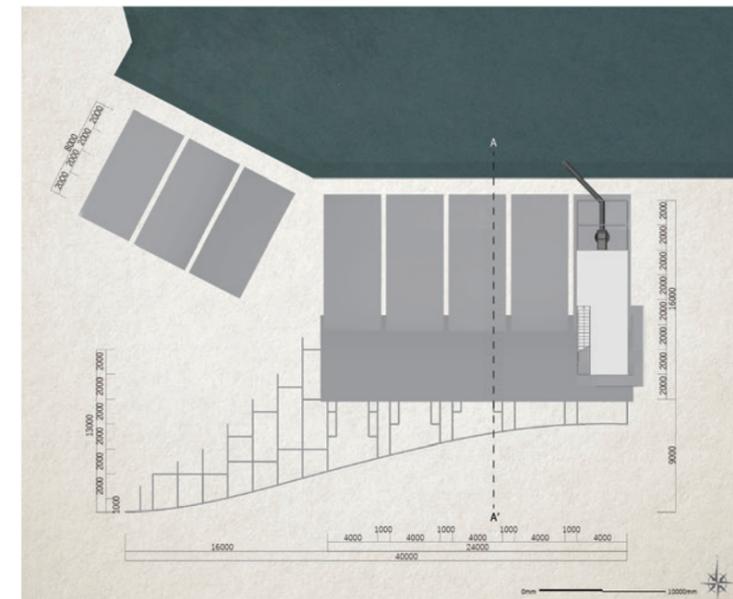
□2 階平面図



□3 階平面図

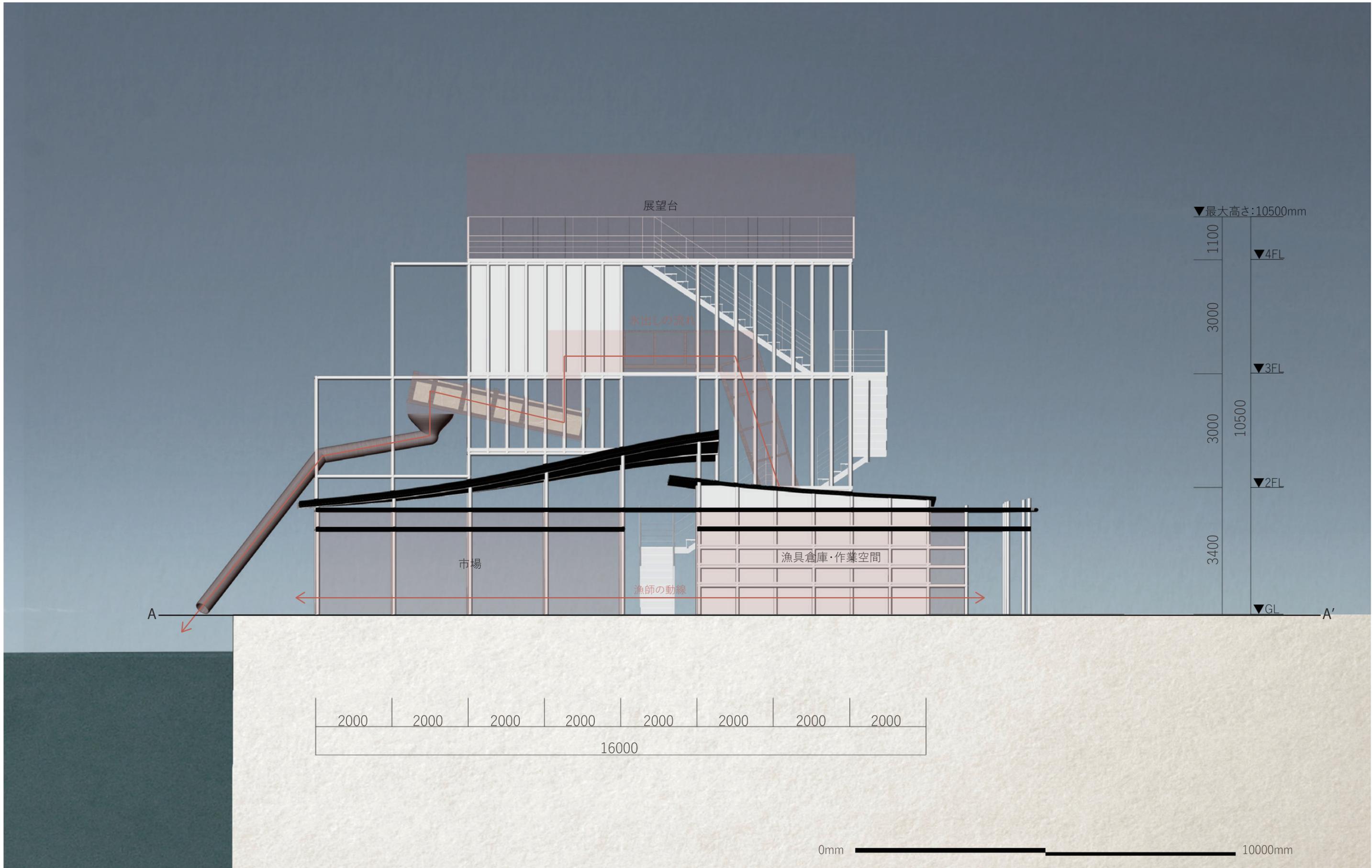


□4 階平面図



□5-2.- Section planning 断面計画

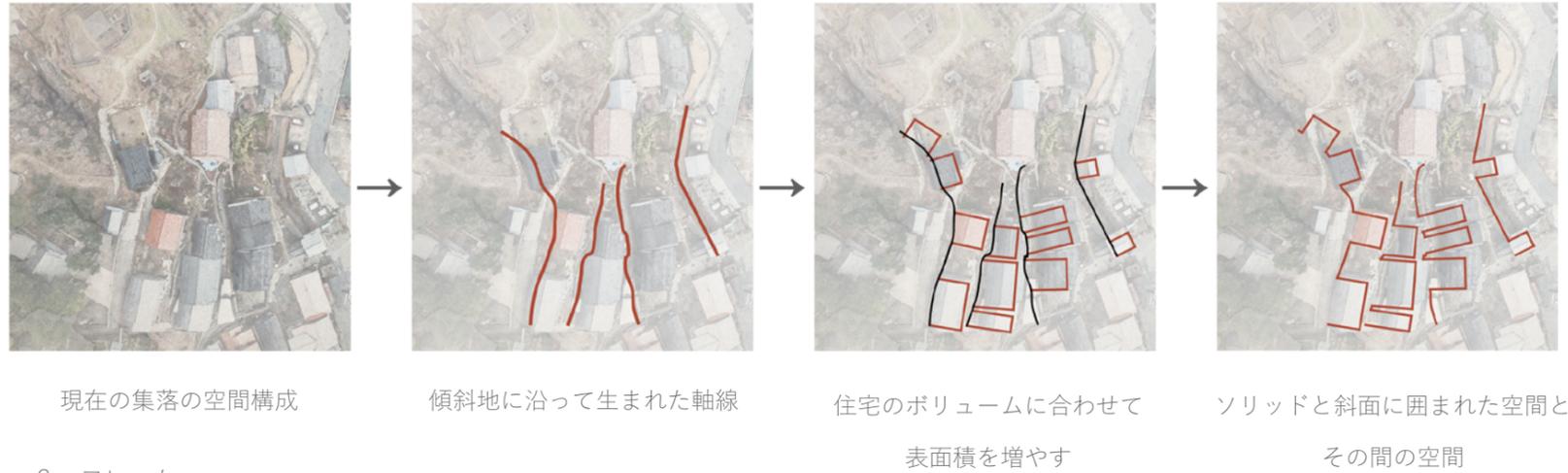
□A-A' 断面図



□6-0.Village-solid 集落空間—ソリッド

傾斜地に沿って生まれた軸線を、現在の住宅のボリュームに合わせて表面積を増やすように形を変える。これをフレームやソリッドとして立ち上げることで、ソリッドと斜面に囲まれた内部と、その間となる外部の二つの空間が生まれる。適度にソリッドを減らし、外部にフレームをはみ出させることで、それぞれの内部で生まれるコミュニティと、外部に残るコミュニティが混ざり合う空間となる。

—1. ソリッド

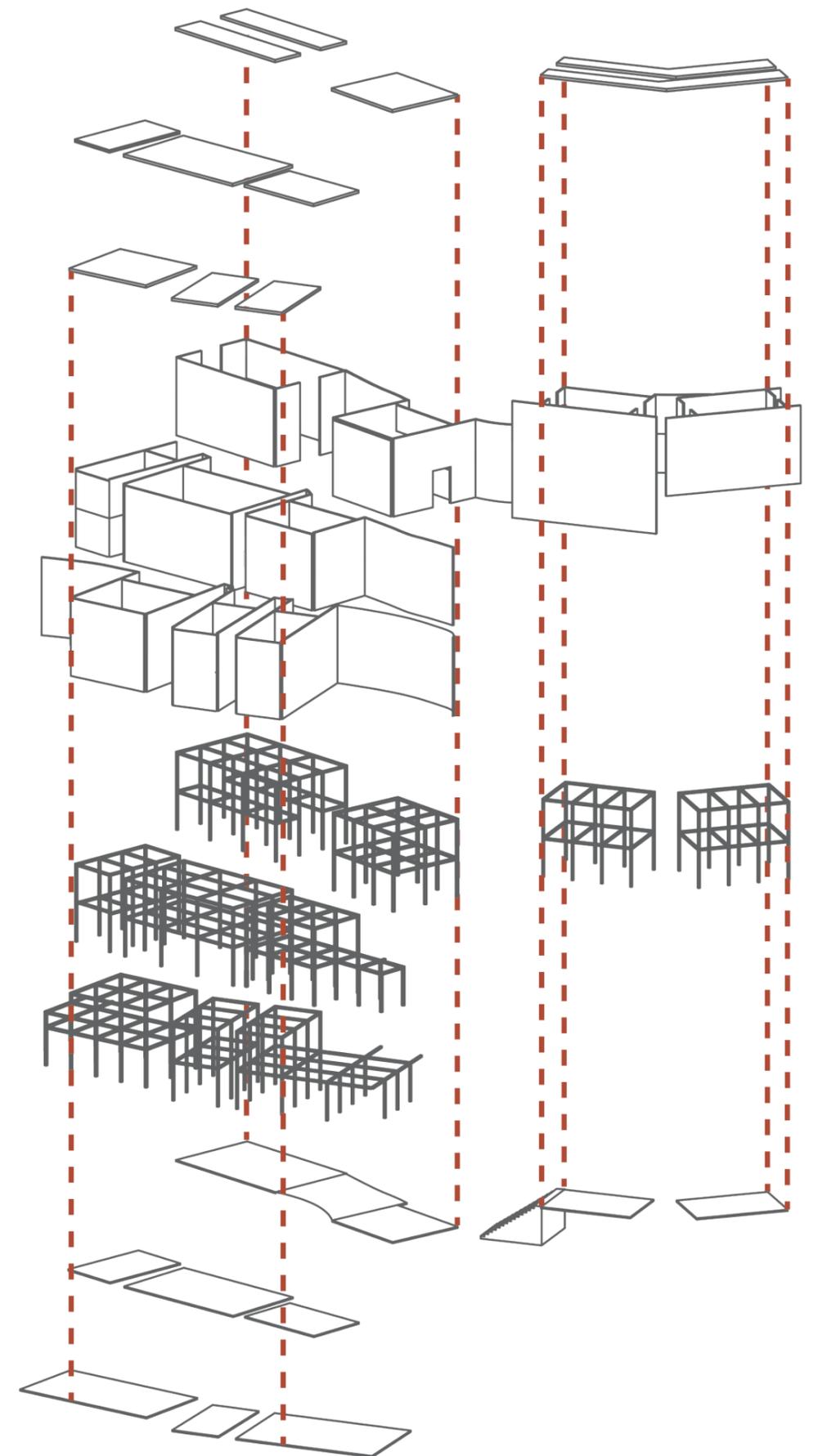


—2. フレーム



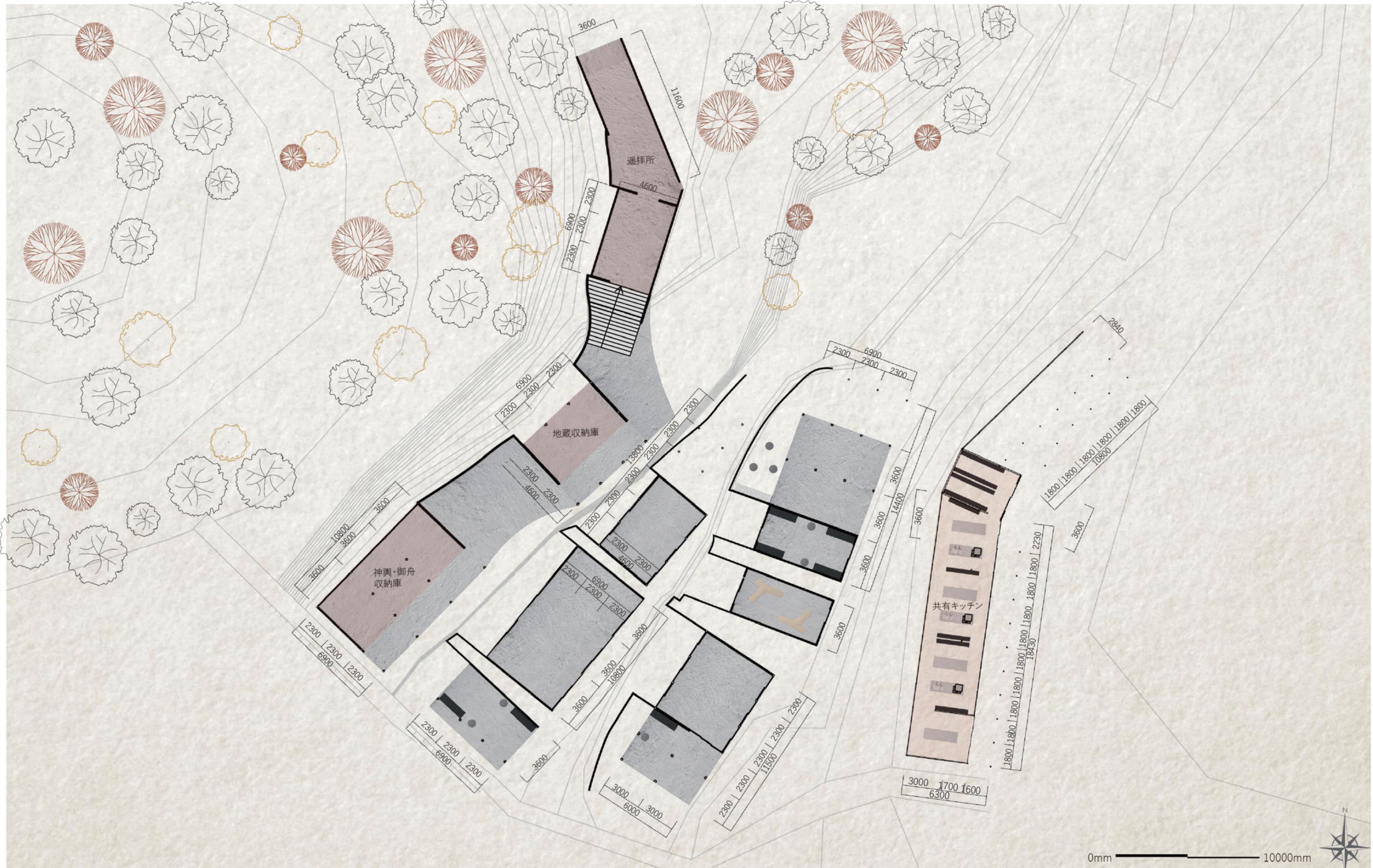
□6-1.-Structure 構造

漁業の衰退、人口の減少、1ターンによる移住者の増加に対応するため、スケルトンインフィルを採用する。柱と梁によってフレームのある空間を形成する。住空間や貸しオフィス、コワーキングスペースなど、時代の変化で変わる用途によって、壁や屋根を取り外しできる構造とした。



□6-2.-Floor planning 平面計画

-1. 1階平面図



□7-1. “Hare” / “Ke” “ハレ” と “ケ”

田後神社から港を繋ぐ空間は、海への信仰との深い関連が顕著に見られる2つの祭祀が行われる舞台に変容する。〈祭祀形態〉として形成されたことを示し、祭祀というソフトウェアとの深い繋がりを感じさせる空間となる。

田後神社に納められている神輿と御舟を担いで運び、ぶつけ合うまでの過程が行われる田後神社と港空間を結ぶ空間は、けんか祭りの舞台となる。細い柱と梁で構成されたヴォイド空間が、神輿と御舟をぶつけ合う主要な舞台となる。共生スペースやワーキングスペースとして使われている空間も、それを見守る観衆が集まる場となる。

また、同じ港空間で、海に向かって祈る地藏盆が行われる。地藏を保管し祀る場を集落に、祭壇となる空間を港に設けることで、二つの祭りが田後神社と集落、港空間を繋ぎ、海への信仰や集落形成の歴史を残す。



□7-2.-Transition 経年変化

漁業が衰退し、人口が減少していく田後地区。空き家の増加、市場や住居の退廃など、多くの問題が生まれることが見込まれる。現在の空間構成を残しつつ更新された建物群は、人口の増減によって用途を変え、その都度かたちも変化していく。

ー1. 1ターンによる移住化の定着：

これから移住してくる移住者のうち、漁業従事者を対象とした貸家を行う。1階を共生スペース「共生する場」を汲んだ計画により建築された空間に居住することで、純漁村集落の空間構成やソフトウェアを感じながら、田後地区について知ることができる。



ー2. さらなる人口の減少：

田後地区は、今後さらなる人口減少の可能性を孕んでいる。さらに住民が減少し、建築物の利用者が減少した時、この空間は、先人が紡いできた空間形成の記憶を残す空間となる。

